

がん集学的治療により危機を脱して外来での治療が可能となった肺腺癌 StageIV の 1 例

福岡徳洲会病院 がん集学的治療センター 成定 宏之、福島 靖之

放射線科 盛岡 丈明

臨床工学科 宮川 哲、福井 啓介、楠 綾、嶋田 愛

症例は 50 歳代男性。

2019 年 1 月に肺腺癌、胸膜播種と診断された。遺伝子変異(-)、PD-1 発現 5% であり、抗がん剤かペンプロリズマブ単剤による治療を提示されたとのことであった。ご本人様の希望により 2019 年 1 月セカンドオピニオンにて当科受診。この時点で疼痛はほとんど認めなかった。

その後当科での治療を希望する連絡あるも、予定受診日の数日前に激痛にて緊急の受診となった。来院時 PS3-4 であり、PET-CT を施行したところ骨を含めた多発性の転移を認め、非常に厳しい状態であると判断された。取り急ぎ疼痛緩和が必要と判断し、オピオイド開始し、疼痛の原因となっている右肋骨の転移による骨折部位への放射線治療＋高気圧酸素療法を含めた疼痛緩和を行い、温熱化学療法併用を行ったところ、著明に腫瘍の縮小が得られ、疼痛は少量のフェンタニル貼付剤にてコントロール可能となった。現在薬剤変更して外来治療を継続しており、QOL は著しく改善した。症例を供覧して考察したい。